



Osaka Gakuin University Repository

Title	ケネス・G・B・デュワーとジウトランド論争 (2) Kenneth G. B. Dewar and the Jutland Controversy (2)
Author(s)	山口 悟 (YAMAGUCHI SATORU)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 32 巻第 1・2 号 : 43-77
Issue Date	2021.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

ケネス・G・B・デュワーとジウトランド論争(2)

山 口 悟

Kenneth G. B. Dewar and the Jutland Controversy (2)

YAMAGUCHI SATORU

目 次

はじめに

1. ケネス・デュワー

A. ケネス・デュワーの経歴

B. デュワーの人物像とその海軍についての考察および主張

2. ジウトランド海戦とジウトランド論争

A. ジウトランド海戦の概要

B. ジウトランド論争

(以上『国際学論集』第30巻、第1・2合併号、2019年12月掲載)

3. 「海軍幕僚評価」

A. 艦隊決戦の戦略的意義

B. ジウトランド海戦での指揮・用兵と大艦隊海戦要務令

C. 戦艦隊の戦闘隊形への展開方法

D. ビーティーとジェリコーへの認識の差異

4. ケネス・デュワーのジウトランド論争との関わりとその背景

おわりに

(以上本号)

3. 「海軍幕僚評価」

海軍省の公式記録として公表された『ジウトランド海戦報告』は、「海軍幕僚評価」の部分削除および修正版といえるものである。その修正作業を担ったポーレン少佐〔退役〕には批判や論評の部分の消去が命じられており、「海軍幕僚評価」のうち、第1章「1916年の状況」、第2章「1916年5月の大艦隊海戦要務令」、第8章「午後6時15分の艦隊展開についての所見」は全部削除され、海軍省の暗号解読部門である第40室（Room 40）の通信傍受に関わる部分など機密上、非公表とすべきと考えられた箇所も削除されている⁹⁵⁾。その他にも削除部分は数多くあり、また残存部分でも文章の修正がいくらかみられるが、基本的に『ジウトランド海戦報告』には「海軍幕僚評価」の文章が損なわれずに残されている。

「海軍幕僚評価」の本体部分の構成は以下の通りである⁹⁶⁾。

序論（Introduction）

第1章 1916年の状況（The Situation in 1916）

第2章 1916年5月の大艦隊海戦要務令（The Grand Fleet Battle Orders of May, 1916）

第3章 海戦までの動き、5月28日～30日（Preliminary Movements, May 28-30）

第4章 午後3時40分から午後4時40分までの巡洋戦艦隊の戦闘（The Battle Cruiser Action from 3.40 pm to 4.40 pm）

第5章 ドイツ大海艦隊出現。午後4時40分から午後5時40分までの戦闘（German Battle Fleet in Sight. The Action from 4.40 pm to 5.40 pm）

第6章 午後2時から午後5時までの大艦隊司令長官の状況認識（Commander-in-Chief's View of the Situation, 2 pm to 5 pm）

95) NSAJ, pp. 6-8, 38-39, 45, 119-121, 132-33. 通信傍受の機密保持のための配慮は、コーベットの『海軍作戦』第3巻〔初版〕においても同様である。

96) NSAJ, p. 2. 全削除となった第1、2、8章を除いたものが、そのまま『ジウトランド海戦報告』の章立てとなる。

第7章 司令長官と巡洋戦艦隊の接触、午後5時35分から午後6時15分 (Commander-in-Chief in touch with Battle Cruiser Force, 5.35 pm to 6.15 pm)

第8章 午後6時15分の艦隊展開についての所見 (Remarks on the Deployment at 6.15 pm)

第9章 最初の半時間、午後6時15分から午後6時40分 (The First Half Hour, 6.15 pm to 6.40 pm)

第10章 第2の交戦とシェーアの退避。南東および南への回頭 (The Second Engagement and Scheer's Turn Away. The Turn to South-East and South)

第11章 夜戦の展開 (Proceedings during the Night)

第12章 水雷戦隊の夜間戦闘 (Destroyer Actions during the Night)

「海軍幕僚評価」では、ジウトランド海戦に関連する各種の批判、たとえば、戦艦隊と巡洋戦艦隊の間の当初の距離が大きすぎて両隊の協働に不利だったこと、海軍省によるハリッジ部隊 (Harwich Force) の控置や、その敵情報取り扱いの不備と過度な情報秘匿主義への批判等が削除部分において数多く散見される⁹⁷⁾。以下においては、デュワーの海軍についての考察と主張にも留意しつつ、批判を多く含む削除部分に注目して「海軍幕僚評価」の内容をみてみたい。

なお、デュワー兄弟の手になる「海軍幕僚評価」であるが、そこに兄アルフレッド独自の見解があるか否かは判じがたい。その内容から判断して、弟ケネスの海軍についての考察と主張が「海軍幕僚評価」において全面的に展開されていることはまちがいない。また、1924年に『海軍評論』にて掲載されたアルフレッドによる『海軍作戦』第3巻についての書評が「海軍幕僚評価」の内容を踏まえたものであることから、少なくとも兄アルフレッドも弟ケネスと同様の見解を有していた、もしくはそれに全面的

97) NSAJ, pp. 40-43, 132-33. ハリッジ部隊は、英仏海峡防衛のためハリッジに置かれた、軽巡洋艦や駆逐艦等で編成された部隊である。

に同意していたと考えられる⁹⁸⁾。ケネスによる自伝等の著作から考えると、やはり海軍に関する専門的知見の深い彼の見解が「海軍幕僚評価」には直接に大きく反映されているとするのが自然かと思われる⁹⁹⁾。

「海軍幕僚評価」の「序論」も『ジウトランド海戦報告』へと修正されるにあたって大幅な削除を被る部分であるが、削除となるその最終部分において、この評価報告が特に幕僚将校による利用とその教育を目的として作成されたものであり、彼らの将来の指針と研究のための教訓を演繹しようとする努力の表れであると記されている。また、海軍に関してきわめて興味深く永続的な二つの主題として、「海軍戦術の適切なシステムと、参謀の働きと指揮統制の適切なシステム」があげられている¹⁰⁰⁾。この「序論」部分からみても、ケネス・デュワーの海軍についての考察や主張が「海軍幕僚評価」に強く反映されていること、またそれを積極的に表現しようとする彼の姿勢がよく感じられるといえよう。

A. 艦隊決戦の戦略的意義

全削除された第1章「1916年の状況」では、敵艦隊を封じ込めるだけでは不十分であり、艦隊決戦による敵艦隊撃滅の必要性が強調されている¹⁰¹⁾。艦隊決戦の重要視、つまり大海艦隊撃滅の重要視は、大海艦隊の戦略的重要性の認識と表裏一体をなす。

大海艦隊はバルト海とヘリゴランド湾（Heligoland Bight）の制海権を

98) [Alfred Charles Dewar], "Naval Operations of War, vol. III. The Battle of Jutland," *The Naval Review*, 12-2 (May 1924). この書評は、作者名が付されていないが、アルフレッド・デュワーの著したものであり、「海軍幕僚評価」と内容的に重なるものである。

99) ケネス・デュワーが兄アルフレッドに補助されて「海軍幕僚評価」の編纂作業にあたった、とハーパーが述べている文書もある。やはり、弟ケネスが主編者との認識があったのではないだろうか。John Ernest Troyte Harper, *Facts Dealing with the Compilation of the Official Record of the Battle of Jutland, Part II, 1928*, in *The Jellicoe Papers; Selections from the Private and Official Correspondence of Admiral of the Fleet Earl Jellicoe of Scapa* (hereafter cited as *JP*), vol. 2, ed. Alfred Temple Patterson (London: Navy Records Society, 1968), vol. 2, p. 482.

100) NSAJ, p. 11.

101) NSAJ, p. 12.

有して、大きな戦略的影響を及ぼしていた。そのバルト海の制海権は、対独封鎖への障害をなし、またスウェーデンからの鉄鉱石輸入などドイツの戦略物資調達を支えるだけでなく、ロシアと連合国との海上連絡線を阻害している。さらにヘリゴランド湾の制海権は、そこをドイツ潜水艦に利用可能とさせて、その通商破壊戦展開の基礎ともなっていた¹⁰²⁾。

甚大な被害をもたらすドイツ潜水艦を抑え込むためには、エルベ川などドイツの河川近辺とカテガット (Kattegat) 海峡狭隘部の機雷などによる封鎖が望ましいが、ドイツの掃海作業を支援する大海艦隊の存在がその実現の妨げとなっていた。さらに大海艦隊の存在は、駆逐艦戦力を艦隊任務に必要とさせて、その船団護衛と対潜作戦への十分な投入を妨げ、またイギリス本土への攻撃に備えて大規模な陸上部隊を本国に必要とせしめた¹⁰³⁾。

つまり大海艦隊の決定的撃破は、バルト海への海軍部隊派遣と対独封鎖の強化を可能とするだけではなく、援助の道を開いてロシアを支えることをも可能とする。それはまたカテガット海峡とヘリゴランド湾の封鎖を可能とするので、ドイツ潜水艦の活動を封殺でき、通商破壊戦の抑止にもつながるのである。大海艦隊が無力化すれば、海軍の過大な負担が軽減され、艦船建造も停止でき、大陸での陸上戦に戦力・資源を集中することを可能として、大戦の早期終結をもたらしたであろう¹⁰⁴⁾。だからこそその艦隊決戦である。

通商破壊戦対策等への配慮から艦隊任務のみに集中できない状態で、しかも優勢なイギリス艦隊との決戦を劣勢のドイツ艦隊が基本的に避けるという状況下に艦隊決戦を生起させるためには、大艦隊がドイツ潜水艦に効果的に対応することによって大海艦隊をドイツ潜水艦支援に赴かしめる必要がある。ドイツ潜水艦に対してイギリスが駆逐艦などで対抗すると、ドイツは軽巡洋艦で対抗し、さらにイギリスは船団護衛に戦艦もしくは巡洋戦艦を派するという具合に事態が拡大した末、最後には大海艦隊のノル

102)NSAJ, pp. 12-15.

103)NSAJ, pp. 14-16.

104)NSAJ, p. 17. cf. Dewar, *Navy from Within*, p. 269.

ウェー沖への出撃に至った1918年4月の事例がこの説の証左である¹⁰⁵⁾。こうした通商破壊戦対策と艦隊戦の相関関係をみすえての方策は、大戦の前半2年間には採られていなかった¹⁰⁶⁾。

艦隊決戦の実現は、敵情報の通信傍受により生じた好機に即応できる状態に大艦隊を保ち続けることによって追求された。これには通商護衛任務などへの割当戦力減少が伴うので、なおさらに一撃で大海艦隊を撃滅するべく、決戦思想と精力的な戦術攻勢が必要だったのである¹⁰⁷⁾。

以上のような「海軍幕僚評価」における艦隊決戦の戦略的意義の叙述は、ハーパー・レコードにも、そしてこの部分の全面削除のために『ジュトランド海戦報告』にも存在しない「海軍幕僚評価」の特徴的かつ興味深い部分である。第1章の削除は、それがデュワーの戦略観の全面的提示部分であるがゆえに理解できるが、それはまた、艦隊決戦勝利の戦略的影響の大きさを述べることで、その勝利を実現できなかったジェリコーへの批判にもつながると認識されたためかもしれない。

海軍省の公式記録となった『ジュトランド海戦報告』の原版である「海軍幕僚評価」において、艦隊決戦による大海艦隊撃滅の戦略的価値が重要視されたことは、それが海軍省の公式見解であったことを示しているといえよう。この艦隊決戦についての海軍省の認識は、『海軍作戦』第3巻を著述したコーベットの認識とは異なっていた。海軍史家・戦略家として著名なコーベットは、第一次世界大戦以前に軍令部長を務めて海軍改革を主導したジョン・フィッシャー（John Arbuthnot Fisher）に近い位置にあって、その戦略立案に協力するなど、イギリス海軍に大きな影響を与えてきた人物である¹⁰⁸⁾。彼の戦略思想にはマハン（Alfred Thayer Mahan）と違っ

105) 1918年4月の大海艦隊の出撃については下記を参照。Marder, *FDSF*, vol. 5, pp. 145-56.

106) NSAJ, pp. 17-18.

107) NSAJ, p. 18.

108) コーベットについては下記を参照。ジュリアン・スタフォード・コーベット [エリック・J・グロウヴ編集] 『コーベット海洋戦略の諸原則』矢吹啓訳（原書房、2016年）。ジェフリー・ティル「コルベットとイギリス流の海戦方法—効果と実行

て艦隊決戦の価値を極大視しない特徴があり、この点は海軍の中に反発もあって、デュワー兄弟も批判的だった¹⁰⁹⁾。「海軍幕僚評価」の第1章冒頭部分では海軍戦略における艦隊決戦の効用を過小評価する考え方が非難されているが、これはコーベットへと向けられたものであろう¹¹⁰⁾。また『海軍作戦』第3巻は、ジュトランド海戦でのジェリコーの指揮に理解を示す一方で、巡洋戦艦隊の戦闘には批判的と思われたがゆえに、ビーティー以下の元巡洋戦艦隊首脳が中心を担っていた海軍省の反感をかうことにもなった¹¹¹⁾。このコーベットへの反発が、『海軍作戦』第3巻の刊行に際して、海軍省が先述の但し書きをわざわざ挿入させることにつながった。

コーベットは、戦闘可能時間の短さと海軍省の敵情伝達の不適當ゆえに、ジュトランド海戦において大海艦隊撃滅をなすためにジェリコーが史実以上にできたことはなかったと考えていた¹¹²⁾。さらにコーベットは、デュワーと違って、海上優勢が維持されているのであれば海戦の勝利は決定的な問題とはならないので、ジュトランド海戦とジェリコーを好意的に評価していた。彼が1922年の講演の最後で述べた、「トラファルガー海戦が与えて、ジュトランド海戦が与えなかった重要な利益とは何なのであろうか」との一節は、両海戦の結果が同様なものであったとの見解を示唆し

にまつわる諸問題」(立川京一、石津朋之、道下徳成、塚本勝也編著『シー・パワー—その理論と実践—』芙蓉書房出版、2008年)。アンドリュー・ランバート「戦略家のための歴史：ジュリアン・コーベット、海軍士官教育、そして国家戦略」矢吹啓訳(『戦略研究』8、2010年)。

109) Schurman, *Julian S. Corbett*, pp. 50-59; idem, *The Education of a Navy: The Development of British Naval Strategic Thought, 1867-1914* (London: Cassell, 1965; Malabar, Florida: Robert E. Krieger Publishing, 1984), pp. 178-79, 183.

110) NSAJ, p. 12.

111) Chatfield to Keyes, Jan. 1923, in *The Keyes Papers: Selections from the Private and Official Correspondence of Admiral of the Fleet Baron Keyes of Zeebrugge* (hereafter cited as *KP*), vol. 2, ed. Paul G. Halpern (London: George Allen & Unwin, 1980), pp. 85-87; Corbett to Jellicoe, 3 Aug. 1922, and Madden to Jellicoe, 14 and 25 Feb. 1923, in *JP*, vol. 2, pp. 415, 437, and 438-39; Lambert, "Writing the Battle," pp. 187, 190; Schurman, *Julian S. Corbett*, p. 192.

112) Corbett to Jellicoe, 19 June 1922, in *JP*, vol. 2, p. 414.

ている¹¹³⁾。これは「海軍幕僚評価」の最終部分において、「大勝利であっても、我々が有するもの以上のものは与えられなかっただろうといわれている。これは海戦についての説得力なき論評である」、とデュワーが批判している見解であろう¹¹⁴⁾。

『海軍作戦』第3巻の書評でアルフレッド・デュワーは、「海軍幕僚評価」の内容を踏まえて『海軍作戦』第3巻を批判し、コーベットの著述がジウトランド海戦の不満足な展開の原因について批判的考察をもたらさないことに失望したと述べている¹¹⁵⁾。弟ケネス・デュワーも、『海軍作戦』第3巻について、コーベットが親ジェリコー・反ビーティーの偏見をもっており、海洋戦争の専門技術的側面に無知でもであると批判し、自身としてはジウトランド海戦についてのコーベットの見解になんらの重要性もみとめていないが、残念ながら一般大衆はそうではないだろうと不満を述べている¹¹⁶⁾。また、のちに彼は自伝において、『海軍作戦』第3巻も『ジウトランド海戦報告』も「海軍幕僚評価」から派生したもののだが、前者を称賛して後者を非難する者は歴史について何も知らない者だと述べている¹¹⁷⁾。

実際にコーベットは『海軍作戦』第3巻の執筆にあたって「海軍幕僚評価」に接していたが、それについて大いに否定的であった。彼は「海軍幕僚評価」を評して、事実の提示には欠点 (faulty) が多く、ジウトランド海戦を検討すればするほどデュワーによる叙述がおかしく (grotesque) 思われ、それを幕僚による報告書 (Staff Account) とよぶのは悪い冗談で

113) Julian Stafford Corbett, "Napoleon and the British Navy after Trafalgar," *The Quarterly Review*, vol. 237-471 (Apr. 1922), p. 255; Andrew Lambert, *21st Century Corbett: Maritime Strategy and Naval Policy for the Modern Era* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 2017), p. 146; idem, "Writing the Battle," pp. 188-91, 194; Schurman, *Julian S. Corbett*, p. 191.

114) NSAJ, p. 144; Lambert, "Writing the Battle," pp. 183-84.

115) [Alfred Dewar], "Naval Operations of War," pp. 286-87, 299-300.

116) Captain Kenneth Dewar to Keyes, 22 May 1923, in *KP*, vol. 2, pp. 88-89.

117) Dewar, *Navy from Within*, p. 266. コーベットは『海軍作戦』第3巻の執筆に際し、1922年はじめの時期に「海軍幕僚評価」を受け取っていた。Lambert, "Writing the Battle," p. 184.

しかないとまで酷評している¹¹⁸⁾。コーベットはジェリコーと親しく、『海軍作戦』第3巻の叙述に際してもジェリコーの助言を得ており、「海軍幕僚評価」への反感は両者に共通するところであった¹¹⁹⁾。

フィッシャー、そしてその協力者であったコーベットは、ドイツにとって戦略的に重要な海域であるバルト海へ圧力をかけ、その脅威により大海艦隊を決戦に誘引して撃滅し、対独封鎖をより強固にして、大戦の早期勝利を図るという戦略構想を抱いていた¹²⁰⁾。コーベットにとって、徴兵制に支えられた巨大な陸軍が大陸で戦うというドイツ式戦争法の採用はまちがいであり、それまでの歴史で実践されてきた、大陸で同盟国が戦う一方で、それを支援するイギリスは海洋から水陸両用作戦も駆使して敵を脅かすという、いわゆるイギリス式戦争法 (the British Way in Warfare) がこそが正しきものであった¹²¹⁾。

実際にはチャーチルの主張によってダーダネルスへの攻撃作戦が採用され、必要な諸資源が浪費されたためにバルト海方面への作戦は実現されなかったが、バルト海の重要性を認識する点で、コーベットとデュワーの戦略観は近いものであった¹²²⁾。両者の差異は、バルト海に踏み込もうとする姿勢を呈して艦隊決戦を強要するか、艦隊決戦に勝利してバルト海に踏み込むか、という順序の点であったともいえようか。しかし、大戦前に長らく海軍を支配したフィッシャーに対し、デュワーは多くの点で反感を覚えており、そのバルト海作戦構想も無謀な考えだと批判している¹²³⁾。フィッ

118) Corbett to Jellicoe, 10 Mar. and 18 July 1922, in *JP*, vol. 2, pp. 413, 414-15.

119) 拙稿「ジユトランド論争とジェリコー」、18～19頁。

120) コーベットとフィッシャーのバルト海攻撃構想については下記を参照。Andrew Lambert, "An Edwardian Intellectual at War: Julian Corbett, and the Battle for British Strategy," in *Jutland, History, and The First World War*, ed. David Gethin Morgan Owen, Corbett Paper, No.18 (King's College London, 2017); Andrew Lambert, "The Possibility of Ultimate Action in the Baltic: The Royal Navy at War, 1914-1916," in *Jutland: World War I's Greatest Naval Battle*, eds. Michael Epkenhans, Jörg Hillmann and Frank Nægler (Lexington, Kentucky: University Press of Kentucky, 2015).

121) Lambert, "Writing the Battle," p. 179.

122) *Ibid.*, pp. 184-85.

123) Captain Kenneth Dewar to Keyes, 22 May 1923, in *KP*, vol. 2, pp. 88-89; Dewar, *Navy from Within*, pp. 101-102, 103, 105, 109-110, 117-19, 144-45, 188-89, 208-209, 242, 356.

シャーのグループ（Fishpond）の代表的人物がジェリコーであり、コーベットであるとすれば、デュワーの経歴を顧みたととき、それまでの海軍の在り方に批判的な彼がコーベットに反発を覚えて批判する立ち位置も理解できるところではある。

B. ジュトランド海戦での指揮・用兵と大艦隊海戦要務令

全削除となった第2章「1916年5月の大艦隊海戦要務令」では、19世紀以降のイギリス海軍の戦術思想が概観された後に、ジュトランド海戦当時の大艦隊海戦要務令（Grand Fleet Battle Orders）の内容が批判されている。

ナポレオン戦争終結後に平和が続くなか、真の意味での海軍戦術は絶え、戦術的効用を無視した、隊形維持と秩序だった航行にきわめて執着する艦隊運動（quadrille-like movements）が墨守されるようになった。それに伴い過度の中央統制が指揮形態の特徴となり、そうした形式に順応した自発性の低い将校がつくられていくことになった。第一次世界大戦を前にした時期に戦術思想の変革は進んでいたものの、戦術問題を扱える参謀組織もなく、海軍大学では指揮統制の原則や戦術の研究に必須の戦史研究が軽視されていた。こうして大戦勃発時には、包括的な戦術原則は存在しなかった。ジュトランド海戦当時の大艦隊海戦要務令は、大戦勃発後に形成されていったものである¹²⁴⁾。

「海軍幕僚評価」での大艦隊海戦要務令への批判は、概ね以下の点に要約される。

i) 防御偏重¹²⁵⁾

大艦隊海戦要務令の内容は基本的に防御偏重であり、特に水雷兵器に対

124)NSAJ, pp. 18-20. cf. Bertram Home Ramsay, Lecture - Jutland I, Grand Fleet Battle Instructions, at the Royal Naval College, Greenwich, 14 June 1929 (delivered), pp. 3-4, Jellicoe Papers, vol. 42, Add. 49030.

125)NSAJ, pp. 21-22, 24, 26-29, 33-36.

する警戒が過剰である。砲戦で敵を撃破するまでは、水雷攻撃対策のため敵艦隊との間に安全な距離をとり、また敵の魚雷攻撃には退避で対応するとされている。敵に誘引されて水雷兵器による待ち伏せ攻撃を受けることを警戒して、積極的追撃も否定されている。

戦艦隊による砲戦が勝敗を決するとの大前提のもとで、戦艦以外の艦種の役割は戦艦隊の防衛とされ、軽艦艇による魚雷攻撃も防御任務より優先順位が下位であるとされた。軽艦艇も有効に使われるべきであるのに、防御偏重の姿勢はその部隊指揮官の行動を抑制して消極的なものとし、主導権と奇襲効果を敵に明け渡している。

潜水艦はその性能から艦隊戦に影響を与えがたく、それは機雷も魚雷も同様であった。さらに実際には魚雷面でもイギリス艦隊は劣勢ではなかった。たとえ英側が魚雷において劣勢だったとしても優勢な砲戦力で補えばよく、ためになお積極的な攻撃姿勢が重要であって、魚雷からは退避するという消極的姿勢は敵艦隊撃滅を困難にする。

ii) 敵艦隊と並航する長大な単縦陣による遠距離砲戦という戦闘想定¹²⁶⁾

大艦隊海戦要務令では、長大な単縦陣を組み、両艦隊が並航して遠距離砲戦をおこなうという基本的想定がなされている。しかし、期待通りの戦闘形態を劣勢な敵艦隊がとるはずはなく、実際にジュトランド海戦でも大海艦隊は離脱を図った。しかも大艦隊海戦要務令には、必要となるであろう追撃戦についての記載はない。漫然とした遠距離砲戦ではなく、敵戦力の一部を戦力集中した優勢な部隊で攻撃することから敵艦隊全体の崩壊をもたらし、その撤退を阻止することが肝要である。

iii) 過度の中央統制と分艦隊戦術の不可能¹²⁷⁾

敵の一部を優勢な戦力で攻撃して、そこから全体的勝利をつかむという分艦隊戦術が必要であり、それは魚雷への対応面でも有用である。しかし、指揮の中央統制が強いために下級指揮官の裁量の余地は主に防御行動

126)NSAJ, pp. 21, 23, 25-26, 31-32.

127)NSAJ, pp. 21-23, 25-26, 31-33.

に限られ、また彼らに自発性がないため事態に即応できない。

大艦隊海戦要務令はいかに行動するかを細かく規定しすぎているが、それは予測不能の事態が起こりがちな戦場では適切ではない。下級指揮官の自発的行動と、その行動が基づくべき概括的な作戦指示が必要なのである。ジウトランド海戦で指揮統制は信号書と詳細な計画のみに基づいていたが、明確で簡潔かつ広範囲な司令長官の作戦意図が示され、それを体した下級指揮官が練達の判断と自発的行動をなしうる作戦指揮がおこなわれるべきだった。

「海軍幕僚評価」で第3章より後に位置する実際の海戦展開を扱った部分においても、上記のような大艦隊海戦要務令に内在する傾向や性質への批判、つまり、単縦陣で敵艦隊と並航して砲戦するとの前提、大量の信号発信に依存して下級指揮官の裁量を認めずに分艦隊戦術を不可能とする過度の中央統制、防御偏重と下級指揮官の積極性・自発性欠如、戦闘序列維持に固執する硬直した戦闘形態、特に水雷兵器への過剰な警戒等々への批判が各所にみられる¹²⁸⁾。また、情報を適切に扱うべき幕僚面での不備も指摘されている¹²⁹⁾。

最終の第12章では夜戦を担った水雷戦隊の戦闘を取り扱っているが、そこでの批判点も数多く、敵情報や司令長官の意図などが下級指揮官、部隊間に共有されていないために敵味方の識別に障害が生じたこと、水雷戦隊の受動的・消極的な部隊行動、その敵情報告の不足などが挙げられている¹³⁰⁾。

128) NSAJ, pp. 89-91, 95-97, 98-99, 105-107, 121-22.

129) NSAJ, pp. 124-25, 130.

130) NSAJ, pp. 134, 138-39, [140], 141, 144; Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 201-202. 大英図書館所蔵ジェリコー文書第54 [Jellicoe Papers, vol. 54, Add MS 49042] 所収の *Naval Staff Appreciation of Jutland (with Appendices and Diagrams)*, No.7のデジタル史料では140頁が欠落している。

http://www.bl.uk/manuscripts/Viewer.aspx?ref=add_ms_49042_fs001r

大艦隊海戦要務令においては明確かつ包括的な敵情報告の必要は明示されておらず、これも海戦での敵情報告不足の一因であったのかもしれない。Brooks, *The Battle of Jutland*, p. 522.

「海軍幕僚評価」で批判されるように大艦隊海戦要務令においては、たしかに損害回避を重視して防御面に、特に水雷兵器に対する警戒に重点が置かれていたことは否定しがたい¹³¹⁾。この背景には、英帝国生存の支柱である大艦隊の戦力保持を極めて重視するジェリコーの戦略観が存在していた¹³²⁾。また、水雷兵器への強い警戒姿勢には、大戦勃発後に軽巡洋艦や駆逐艦戦力が不足していたこと、水雷兵器をもつての近代戦が初めての経験であったこと、それに慎重なジェリコーの性格も影響していたといえる¹³³⁾。ただし、水雷兵器への懸念は広く海軍内部で共有されていた感覚であり、ジェリコーの個人的見解のみに帰されるべきものではない¹³⁴⁾。

水雷兵器への恐れとイギリス側の砲戦力優勢との判断は、戦艦隊の遠距離砲戦を戦闘の基軸とすることにつながった。これには砲術専門というジェリコーの経歴とそこから培われた戦術面での思考の傾きも影響していたかもしれない¹³⁵⁾。この戦艦隊への偏重が、水雷戦隊を主に防御的役割へ追いやり、その結果として敵への打撃を減じることにも通じたといえる¹³⁶⁾。

「海軍幕僚評価」では単縦陣批判と分艦隊戦術の利点の強調がなされているが、分艦隊戦術は大戦前に本国艦隊で一時検討・試行されたことがあったものの、当時、海軍で一般的に受容されていたのは単縦陣戦術であった¹³⁷⁾。このため海軍内部でも、それへの批判が士官の教育用資料であ

131) Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 98-105, 109, 522.

132) Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 5-6.

133) Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 99, 105, 521, 546; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. 264.

134) Brooks, *The Battle of Jutland*, p. 102; Shleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 257-59.

135) Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 18, 30-31.

136) Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 527-28, 547; Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 24-25, 30-31.

137) Dewar, *Navy from Within*, pp. 123-24; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 28; Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 11-13. 1911年に本国艦隊司令長官メイ (William Henry May) 大将は、参謀であったリッチモンドの促しもあって分艦隊戦術を試行した。また、第一次世界大戦勃発時まで本国艦隊司令長官であったキャラハン大将も、下位指揮官の自発的指揮の重要性を認識していたようである。cf. Christopher M. Buckley, *Genesis of the Grand Fleet: The Admiralty, Germany, and the Home Fleet, 1896-1914* (Annapolis MD: Naval Institute Press, 2021), pp. 185-94; Dewar, "Battle of Jutland," I, pp. 403-404.

る「海軍幕僚評価」に存在するのは不適切との意見や、分艦隊戦術への批判的見解も存在していた¹³⁸⁾。ジウトランド海戦に限って考えても、視界状態の悪さゆえに分艦隊戦術の適用は非常に困難であっただろう¹³⁹⁾。

デュワーと同じく、海軍において分艦隊戦術を提唱した例外的人物が、ジウトランド海戦で第4戦艦戦隊を率いたスターディー中将である。その意見を彼は1915年から翌年にかけてジェリコーに訴えたが、退けられている¹⁴⁰⁾。大艦隊海戦要務令に規定された戦術の変更に対するジェリコーの反対には、いつ大海艦隊との艦隊戦が生起するか不明な状況下に新戦術を採用しても、それに習熟する時間的余裕などありえないため、かえって戦闘能力を阻害することになりかねないという懸念も背景に存在していたようだが、ひとたび規定された戦術原則の変更を嫌うジェリコーの性格も影響していたことだろう¹⁴¹⁾。

大艦隊海戦要務令は、彼が本国艦隊第2戦隊司令官を務めていた1912年

138) Director of Training and Staff Duties to DCNS & 1st SL, 26 July 1922, and, Memorandum by Keyes DCNS and Chatfield ACNS on the Naval Staff Appreciation, 14 Aug. 1922, in *BP*, vol.2, pp. 454, and 455; Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 12-13, 14-15.

ジェリコー文書所収の「海軍幕僚評価」の遊び紙に貼付された紙片には、「海軍幕僚評価」における分艦隊戦術の主張への批判がタイプ打ちされた文章で記されている。「海軍幕僚評価」の余白部分と見返し部分には、ドレイヤー (Frederic Charles Dreyer) による書き込みが多く残されており、上記紙片文章も彼の手によるものだろうか。なお、彼の書き込みの中には、「ばかな (Rubbish)」という語も散見される。NSAJ, pp 19, 23, 49, 81, 85, 106, 122; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. 297.

他にも分艦隊戦術に批判的な者として、たとえば、オールサム (Edward Altham) 大佐 [退役] があげられる。Joseph Moretz, *Thinking Wisely, Planning Boldly: The Higher Education and Training of Royal Navy Officers, 1919-1939* (Solihull, West Midlands, England: Helion, 2014), pp. 73-74.

139) Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 125-26; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 259-60, 297.

140) Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 31-33; Stephen McLaughlin, "Equal Speed Charlie London: Jellicoe's Deployment at Jutland," *Warship 2010*, eds. John Jordan and Dent Stephen (London: Conway, 2010), p. 134. スターディーの下で第4戦艦戦隊第3戦艦隊を率い、副司令官を務めたダフ (Alexander Ludovic Duff) 少将も、スターディーの戦術見解に同意していた。

141) Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 31, 33.

に作成したものをもとに大戦勃発後に作り上げていった、まさにジェリコーの戦術構想の統合体といえるものであった¹⁴²⁾。それは開戦直後の3頁の覚書から1915年12月までに75頁もの大分量に拡張されていくが、当然そこには作り手の性格や姿勢が投影されていた¹⁴³⁾。先述のように大艦隊海戦要務令における防御面への傾斜もその表れであるが、同様に責務を分担しようとしないう彼の性格や姿勢が、強い中央統制という大艦隊海戦要務令の特性にも結びついていたといえよう¹⁴⁴⁾。もともと、過度の中央統制は、デュワーの考察にも表されているように、海軍全体の特性であった。「中央統制は海軍の指揮統制の固有部分となっていた。それは80年代と90年代のほぼすべての海軍士官の骨にまで染み入り、その後の世代の艦隊司令官たちに深く浸透していた」のである¹⁴⁵⁾。その特性は大艦隊海戦要務令の多数の規定を産むことにつながり、その分量の大きも「海軍幕僚評価」において批判される場所であった¹⁴⁶⁾。

大艦隊海戦要務令は、過度の中央統制が単縦陣戦術、下級指揮官の指揮権限の不十分、彼らの低い積極性・自発性、分艦隊戦術の実施困難と相互に関連しているとのデュワーの批判点をまさに具現化したものといえた¹⁴⁷⁾。あるいは逆に、「海軍幕僚評価」の作成を通して、デュワーは海軍についての考察を深め、自らの批判や主張を明確化したともいえるのかもしれない。いずれにしても、デュワーにとって、大艦隊海戦要務令に基づいて戦

142) Extracts from Jellicoe's "War Orders and Dispositions. . . Prepared when in [command of] 2nd Division, Home Fleet" (Add. MSS. 49012, ff. 2-16), in *JP*, vol. 1, (London: Navy Records Society, 1966), pp. 23-25.

143) Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. 251. cf. Extracts from Grand Fleet Battle Orders (Adm. 137/288, ff. 1-39), 18 Aug. 1914, and, Extracts from Grand Fleet Battle Orders in force on the eve of the Battle of Jutland (Add. MSS. 49014, ff. 1-6, 14 and 18), in *JP*, vol. 1, pp. 52-63, and 243-53. また、1914年10月30日付のジェリコーの海軍省宛書簡も当時の彼の戦術観を知る上で重要である。Jellicoe to the Secretary of the Admiralty (Add. MSS. 49012, ff. 23-5), 30 Oct. 1914, in *JP*, vol. 1, pp. 75-77.

144) Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 521, 546.

145) NSAJ, p. 32n. 19世紀以来のイギリス海軍の特性とジウトランド海戦の関係については下記が詳しい。Gordon, *The Rules of the Game*.

146) NSAJ, p. 21; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. 252.

147) cf. Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 20-23, 30.

われたジウトランド海戦の展開は海軍の諸欠陥を露呈したものに思われ、大艦隊海戦要務令を作成し、ジウトランド海戦で大艦隊を総指揮したジェリコーは、その海軍の有り様の象徴的人物と認識された。

総じて大艦隊海戦要務令は、深刻な損害を避ける点に重きが置かれており、特に戦闘を避けて撤退を意思する敵に対し、どのように対応すべきか解答したものではなかった。しかし、それは最後までジェリコーには解けなかった難問であり、評価すべきところは多々あるとはいえ「海軍幕僚評価」による大艦隊海戦要務令への批判をそのまま受け入れることも難しく、それはジェリコーにとっても酷に過ぎよう¹⁴⁸⁾。

C. 戦艦隊の戦闘隊形への展開方法

全削除となる第8章「午後6時15分の艦隊展開についての所見」では、ジェリコーがおこなった左翼先行展開について以下のように批判している。

右翼先行展開の場合でも、実際にはドイツの魚雷攻撃の脅威は小さなものであって、戦艦隊最右翼に位置して単縦陣先頭を担うことになる戦艦マールバラ（HMS Marlborough）の第1戦艦戦隊第6戦艦隊への危険もそれほど大きくはなく、また第5戦艦戦隊の支援も期待しえた。左翼先行展開では危険は低減するが、少なくともさらに4,000ヤードも敵から離れてしまい、日照時間が限られるなか戦闘可能時間を短縮することになって、決定的勝利の可能性が減じられてしまった。代案として、ジェリコー座乗の総旗艦アイアン・デュークが先頭となる中央部先行展開があり、これは右翼先行展開より安全なうえ、左翼先行展開よりも敵との距離を短縮できる利点を有していた¹⁴⁹⁾。

さらに、第9章の削除部分においても、大艦隊戦艦隊に面した大海艦隊が急反転して一時的に危地を脱することができたのは、大艦隊が大海艦隊を実質的に視認できないほど離れた位置において戦闘隊形へ展開したため

148) Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 522, 546-47.

149) NSAJ, pp. 83-85.

でもであると批判されている¹⁵⁰⁾。

「海軍幕僚評価」に散見される点であるが、以上の批判は、戦闘隊形への展開時点における最右翼隊への実際の危険度など、海戦当時のジェリコーが知らなかった事実に基づいており、彼にとって不当なものといわざるをえない。また、右翼先行展開は全部隊の戦闘参入まで30分ほど時間がかかる不利があるだけでなく、なにより大艦隊主力を発見した大海艦隊が艦隊決戦を受け入れるとは想像しがたく、それは最右翼で単縦陣先頭部をなす戦艦マルバラの戦隊を痛打して、すぐにヘリゴランド湾方面へ撤退を図るのではないかと思われる¹⁵¹⁾。ドイツの公刊戦史でさえ右翼先行展開の不利を述べていることから、その危険は明らかであろう¹⁵²⁾。

また、デュワーは、戦闘隊形への展開時に戦艦隊右翼方面にいた第5戦艦戦隊が戦艦隊後尾に続くべく、より敵に近接した位置で旋回しながらも損害軽微だったことから、それと近い位置でおこなわれたらう主力戦艦隊の右翼先行展開も大きな危険にはさらされなかったはずだと論じている¹⁵³⁾。しかし、その旋回時に第5戦艦戦隊は敵の激しい砲撃を被っており、損害軽微であったのは幸運の作用した面が大きく、危険が少なかったわけでは決してなかった¹⁵⁴⁾。

「海軍幕僚評価」では中央部先行展開が支持されているが、不慣れかつ複雑な艦隊運動を敵前で実行する危険と、司令長官が最も危険な艦隊先頭部に位置することになる不利益にかんがみるなら、それは主張されるほど得策とは思われない¹⁵⁵⁾。実際、海軍部内にも中央部先行展開に対する反論

150) NSAJ, p. 95.

151) McLaughlin, "Equal Speed Charlie London," pp. 134-35. ジュトランド海戦における戦艦隊の戦闘隊形への展開については、この研究が詳しい。

152) Brooks, *The Battle of Jutland*, p. 280; Frederic Charles Dreyer, *The Sea Heritage: A Study of Maritime Warfare* (London: Museum Press, 1955), p. 187; Marder, *FDSF*, vol. 3, p. 105.

153) NSAJ, p. 87.

154) Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 134-35.

155) Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 106-107; McLaughlin, "Equal Speed Charlie London," pp. 135-37.

はあり、たとえば1929年に海軍大学でジウトランド海戦について講義したラムゼー（Bertram Home Ramsay）大佐は、ジェリコーのおこなった左翼先行展開を支持し、右翼先行展開と同様に中央部先行展開においても生じる危険を指摘している¹⁵⁶⁾。

大海艦隊のドイツ方面への撤退を阻む位置に占位するなど、ジェリコーの左翼先行展開の利は明らかである¹⁵⁷⁾。最良の選択と思える展開をもってしてもなお、劣勢の大海艦隊が撤退を図ることは避けられえず、決定的戦果の獲得はならなかったが、それこそがジウトランド海戦の真実であろう¹⁵⁸⁾。史実以上の戦果の要求はジェリコーにとって実現不可能だったと思われる。

D. ビーティーとジェリコーへの認識の差異

「海軍幕僚評価」では、ジェリコーが直接に指揮する大艦隊戦艦隊に関する削除部分、つまりは批判的部分が多数存在するのに対し、ビーティー率いる巡洋戦艦隊への批判はなされておらず、このことから「海軍幕僚評価」における認識の傾きをうかがうことができる¹⁵⁹⁾。巡洋戦艦隊が戦闘を主導したのは海戦の前半部分、いわゆる「南への追撃」と「北への後退」の段階で、「海軍幕僚評価」における第4・第5章の部分であるが、変更部分はあっても第4章での削除部分はほぼなく、第5章でも少ない。つまり、それらの部分は、もとより巡洋戦艦隊への批判を有しておらず、ほとんど修正なしに海軍省公式記録である『ジウトランド海戦報告』に採り入れられたということである。ジェリコー率いる戦艦隊関連の削除部分の多さとの対照は鮮明である。また「海軍幕僚評価」には、ビーティーと巡洋

156) Ramsay, Lecture - Jutland III on the Battle of Jutland, 18 June 1929 (delivered), pp. 29-30, Jellicoe Papers, vol. 42, Add. 49030. 彼は、のち第二次世界大戦中の1940年にダイナモ作戦（Operation Dynamo）を指揮してイギリス大陸派遣軍のダンケルク撤退を成功させたラムゼー中将である。

157) 拙稿「ジウトランド論争とジェリコー」（『国際学論集』第25巻1・2号、2014年12月）、9～13頁。Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 279-80; Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 105-108.

158) McLaughlin, "Equal Speed Charlie London," p. 138.

159) Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 243-47.

戦艦隊への好評価が感知される表現、たとえば、「しかしながら、ビーティー提督は新たな隊形の重要性をよく理解していた」や、「巡洋戦艦隊は採るべき針路を示した」などという文言が散見され、デュワーのビーティーと巡洋戦艦隊への偏好を感じざるをえない¹⁶⁰⁾。極言するなら、「海軍幕僚評価」はジェリコーを低評価し、ビーティーを高評価するのであった。

ビーティーに偏好した姿勢は、巡洋戦艦隊の失敗に対する不問の姿勢によく表れている。ジウトランド海戦における実際の巡洋戦艦隊の戦闘は、不首尾なものであった。ドイツ巡洋戦艦隊を追撃するイギリス巡洋戦艦隊の艦隊運動は拙く、有効な攻撃態勢の構築に失敗した。巡洋戦艦隊は砲撃配分にも混乱し、砲撃命中率も低く、その速射への偏重は弾薬取扱いの不適當を招いて巡洋戦艦爆沈の誘因になったと考えられる¹⁶¹⁾。また、適切かつ十分な敵情報告を司令長官のジェリコーにもたらしこともできなかった。さらに当時一般的な印象と違って、両艦隊主力の会敵以後のビーティーの行動は、戦闘を求めて勇猛果敢とはいいがたい慎重なものであった¹⁶²⁾。

大艦隊主力から臨時に巡洋戦艦隊へ配属されていた第5戦艦戦隊の用兵にも大きな過失があった。ビーティーは信号連絡の不手際もあって、その戦力の有効利用ができず、苦戦の一因をつくったのである¹⁶³⁾。「南への追撃」では連携不足のため、巡洋戦艦隊は第5戦艦戦隊の強力な支援を適時に受けられず、「北への後退」では、巡洋戦艦隊から遅れ、離されてしまったために第5戦艦戦隊が大損害を出しかねない窮境に陥ることになった。

そうした巡洋戦艦隊の失敗について、「海軍幕僚評価」が批判することはない。自らに都合のよい内容となっているビーティーの報告書に影響されているところもあるのかもしれないが、それにしても戦艦隊への批判との落差は大きいというほかない¹⁶⁴⁾。なお、海戦中の5月31日午後7時ごろ

160) NSAJ, pp. 99, 107.

161) 拙稿「ジウトランド論争とビーティー」、198～200頁。

162) Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 533-42, 48; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 68-69.

163) Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 482-86.

164) *Ibid.*, pp. 535, 537, 541.

の巡洋戦艦隊による360度旋回の存在の真偽はジュトランド論争の一争点であるが、「海軍幕僚評価」での言及はない¹⁶⁵⁾。のちにデュワーは、巡洋戦艦隊旗艦の巡洋戦艦ライオン（HMS Lion）が360度旋回をなしたか否かの問題など何の重要性もないように思えると述べている¹⁶⁶⁾。

こうしてビーティーと巡洋戦艦隊の失敗が不問に付される一方、ジェリコーとその大艦隊主力たる戦艦隊の行動は厳しい批判にさらされている。先にみた大艦隊海戦要務令への批判は、それを形成したジェリコーへの根本的批判につながる。さらに戦闘隊形への展開をめぐる批判のように、ジェリコー批判は「海軍幕僚評価」において広く展開されており、それら数多い部分が削除されることになった。

ジェリコーの水雷兵器に対する慎重な姿勢は、ジュトランド海戦において、とりわけ31日午後7時20分台におこなわれた雷撃退避に表れた。この慎重な艦隊運動を「海軍幕僚評価」は批判し、敵への追撃を継続すべきだったとする立場を示している¹⁶⁷⁾。また戦艦隊が巡洋戦艦隊の支援に鈍

165) Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 142n, 246. 「海軍幕僚評価」の付表34 (Diagram 34: Approximate positions at 6.56PM) に、その暗示はある。

なぜかデュワーは自伝において事実とは逆に、ハーパー・レコードでは2度の半円形旋回がなされたと記されているがビーティーは360度旋回を記憶しているとし、文書資料は決定的ではないものの全体的にはハーパー・レコードの方を支持している、と述べている。Dewar, *Navy from Within*, p. 267. 参照、拙稿「ジュトランド論争とハーパー・レコード」(『国際学論集』第27巻1・2号、2016年12月)、87～88頁。

166) Captain Kenneth Dewar to Keyes, 22 May 1923, in *KP*, vol. 2, p. 88.

167) NSAJ, pp. 106-107. ジェリコーの魚雷退避については下記も参照。Brooks, *The Battle of Jutland*, pp. 511-13, 526-27; Dreyer, *Sea Heritage*, pp. 181-82.

「海軍幕僚評価」では、魚雷に対しては退避 (turn away) より対向して進んで回避 (turn towards) する方が被雷面を少なくできると述べられている。マードーによると、第一次世界大戦前の演習で両方の魚雷対応策が実践されたが、退避の方がより安全であるように思われた。大戦後にイギリス海軍は魚雷に対して退避が唯一の安全策であるとしたが、1930年代までにはその見解が変化していき、第二次世界大戦中には基本的に対向回避が受け入れられたという。NSAJ, p. 35; Marder, *From the Dardanelles to Oran*, pp. 36-37n; idem, *FDSF*, vol. 3, pp. 9-10. cf. Extract from Battle Instructions (Dated 1st June 1928), Ramsay's Lectures - Jutland, at the Royal Naval College, Greenwich, June 1929 (delivered), Jellicoe Papers, vol. 42, Add. 49030.

かったことも批判されている¹⁶⁸⁾。

「海軍幕僚評価」は、大海艦隊を取り逃がした夜間の大艦隊の動きを「海戦の最暗黒部分」だと酷評している。「戦闘隊形への展開と魚雷攻撃退避は戦術領域の問題であるが、敵の追撃は全く別問題である」とし、積極的に追撃しなかったことを、とりかえしのつかない罪としてジェリコーを強く非難しているのである¹⁶⁹⁾。

「海軍幕僚評価」の「序論」において、ジェリコー座乗の総旗艦アイアン・デュークの信号記録の不備をあげつらい、なんらかの不正行為があったかのような印象を生み出していることなどからみれば、「海軍幕僚評価」のジェリコーへの認識の在り方は明らかである¹⁷⁰⁾。また、「海軍幕僚評価」における批判に、たとえば先述した戦闘隊形への戦艦隊展開時の水雷攻撃の危険度など、当時のジェリコーが知る由もなかった事実に基づいたものがあることも、彼に対する不公平な扱いを感じさせる¹⁷¹⁾。

ビーティーとジェリコーへの認識の大きな差異が、「海軍幕僚評価」には明らかに反映されている。そして、それが大きな反発を招いて、ジウトランド論争の激化に影響することになったのである。

4. ケネス・デュワーのジウトランド論争との関わりとその背景

デュワーの見解が至るところにみられる「海軍幕僚評価」は、ジウトランド海戦を題材とした彼の主張の結晶体であるといえる。そうであるから

168)NSAJ, p. 110.

169)NSAJ, p. 129.

170)NSAJ, p. 6; Nicholas Jellicoe, *Jutland*, p. 338; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. 4.

171)Marder, *FDSF*, vol. 3, pp. 104n, 125-26; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 110n, 115-16.

「海軍幕僚評価」の部分削除・修正版である『ジウトランド海戦報告』に対してであるが、ジェリコーは、ジウトランド海戦当時の彼には知られなかった事実に基づいての推論が多々なされると反論している。これに対し海軍省は、事実のみに限定して、推論や解釈は厳しく抑制していると再反論している。*Narrative*, App. G, p. 106.

こそ、当時一般に受容されていた戦術思想に合致せず、また従来のイギリス海軍の有り様の典型ともいえるジェリコーへの批判に過ぎるものとなってしまうのだろう。「海軍幕僚評価」を叙述するデュワーの「精神的姿勢は、事実の公平な評価者というよりも、むしろ検察官のそれであり」、「文書全体を通して、その叙述には明らかな偏見がいきづいており、風刺的な言説や、いくらかの誤った説明につながっている」と観察されるほどであった¹⁷²⁾。信じることを主張するのを躊躇しない彼の性格も、その批判的基調の強化につながったといえよう。

この批判に過ぎる特徴は、「海軍幕僚評価」の配付・公表の中止をもたらした。さらにビーティーを後継した軍令部長マッデンを長とする海軍省は、「海軍幕僚評価」をすべて廃棄することとした。ジェリコーと親しい関係にあったマッデンは、「海軍幕僚評価」に強く反発を感じていた¹⁷³⁾。結局、「海軍幕僚評価」は未公表となり、それゆえイギリス海軍に直接的影響を及ぼせなかった。イギリス海軍がジウトランド海戦の戦訓も踏まえて、のちに指揮における中央統制の緩和等の改革を進めたのは事実であるが、それに「海軍幕僚評価」が直接的貢献をなしえたわけではなかった¹⁷⁴⁾。

しかし、批判過多の基調と単縦陣など当時の戦術思想への批判については賛同できないとしつつも、ビーティー軍令部長下の海軍省は、「海軍幕僚評価」の主要結論、つまりジェリコーの不手際により大海艦隊撃滅の好

172) Director of Training and Staff Duties to DCNS & 1st SL, 26 July 1922, in *BP*, vol. 2, p. 454.

173) Madden to Jellicoe, 14 and 25 Feb. 1923, in *JP*, vol. 2, pp. 437, and 438-39. マッデンは、ジェリコーの義妹の夫にあたり、かつて大艦隊司令長官だったジェリコーの参謀長を務めた人物で、彼と非常に近い関係にあった。

174) Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 264-66.

ジウトランド海戦など第一次世界大戦の戦訓のイギリス海軍による受容については下記を参照。Marder, *From the Dardanelles to Oran*, chap. 2; Joseph Moretz, "The Legacy of Jutland: Expectation, Reality and Learning from the Experience of Battle in the Royal Navy, 1913-1939," in *Britain's War at Sea, 1914-1918: The War They Thought and the War They Fought*, ed. Greg Kennedy (London; New York: Routledge, 2016); Jon Tetsuro Sumida, "The Best Laid Plans: The Development of British Battle-Fleet Tactics, 1919-1942," *The International History Review*, Vol. 14-4 (Nov. 1992).

機を逃したとする見解には全面的に同意できると感じていた¹⁷⁵⁾。それが海軍を分裂させかねないという危機感ゆえに公表を断念したものの、その「海軍幕僚評価」の基本的見解は、当時の海軍省のジウトランド海戦に対する公式見解であったといえる。それゆえにこそ、多くの部分を削除したとはいえ「海軍幕僚評価」は海軍省公式記録である『ジウトランド海戦報告』の原型となりえたのである。

さらに「海軍幕僚評価」の影響は、海軍省の外側にも発揮された。チャーチルは『世界の危機』の執筆にあたって「海軍幕僚評価」を参考にしており、ジウトランド海戦の勝利がロシア情勢の展開にもちえた戦略的意味などに認識を広め、またジェリコーの慎重な指揮への否定的見解に同感するなど、大いにデュワーの主張に影響を受けていた¹⁷⁶⁾。ビーティーからデュワーを推薦されて、チャーチルはジウトランド海戦についてデュワーと直接に話し合っている¹⁷⁷⁾。デュワーの影響は、「海軍幕僚評価」と同じく戦艦隊の中央部先行展開の主張が『世界の危機』にあることからよく感知される¹⁷⁸⁾。『世界の危機』がジウトランド論争に与えた影響を思えば、「海軍幕僚評価」とデュワーがジウトランド論争に及ぼした影響力は大きかったといえることができる。

兄アルフレッド・デュワーが第一次世界大戦後に、『ブリタニカ百科事典 (*The Encyclopædia Britannica*)』第12版においてジウトランド海戦を

175) Memorandum by Keyes DCNS and Chatfield ACNS on the Naval Staff Appreciation, 14 Aug. 1922, in *BP*, vol. 2, p. 455.

176) Churchill to Keyes, 25 Aug. 1924, in *KP*, vol. 2, p. 104; Stephen Wentworth Roskill, *Churchill and the Admirals* (London: Collins, 1977), pp. 59-60; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 57, 114n.

177) Churchill to Keyes, 16 Sep. 1926, in *KP*, vol. 2, p. 190; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 118; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. xxvi-xxvii.

チャーチルとデュワーの関係は以後もつづき、ロイヤル・オーク事件の際にも、チャーチルはデュワーを弁護して、「デュワーのような人材を海軍は失ってはならない」と海相ブリッジマン (William Clive Bridgeman) に手紙にて抗議している。デュワーは退役後、チャーチルの歴史書著述の補助にもあたっている。Roy Jenkins, *Churchill* (London: Macmillan, 2001), p. 429; Roskill, *Churchill and the Admirals*, p. 60.

178) Churchill, *The World Crisis*, vol. 3, pt.1, pp. 148-49.

含むいくつかの海軍関係項目の執筆者となっていることも、「海軍幕僚評価」が影響をもちえた例といえるかもしれない。そこでの彼の著述は、その基調において「海軍幕僚評価」と通底しているものであった¹⁷⁹⁾。

「海軍幕僚評価」でのジェリコー批判は、先にみたように戦術面での不備と不手際により、戦略的に大きな意味をもちえた勝利を逸したとする全面的なものである。『ジュトランド海戦報告』に対してジェリコーは強く反発を示したが、大きく削除部分があるとはいえ、それが元来は「海軍幕僚評価」であることを思えば、反発の惹起は当然といえた。「海軍幕僚評価」は、軍令部長ビーティーや軍令部長補チャトフィールド（Alfred Ernle Montacute Chatfield）少将など巡洋戦艦隊出身者と、軍令部次長キース（Roger John Brownlow Keyes）中将などビーティーに近い者から成る

179) Alfred C. Dewar, 'Jutland, Battle of' and 'Naval History of the War,' *The Encyclopædia Britannica*, 12th ed., vol. 31 (London: The Encyclopædia Britannica Company, 1922) (hereafter cited as *EB*), pp. 660-67, and 1077.

1926年に刊行の『ブリタニカ百科事典』第13版では、前版に引き続いてアルフレッド・デュワーがいくつかの海軍関連項目を担当しながらも、「ジュトランド海戦」の項目はオールサム大佐〔退役〕の執筆に代わり、一転してジェリコーを評価するものとなっている。この変化は「ジェリコー」の項目についても同様で、第12版でのフィルソン・ヤング（Alexander Bell Filson Young）によるものがジェリコーに批判的な傾向を有していたのに対し、代わって第13版でオールサムが担当したものはジェリコーを評価するものである。ヤングは、巡洋戦艦ライオンに乗艦した経験を有する、ビーティーに近い関係にあったジャーナリストで、『巡洋戦艦隊とともに（*With the Battle Cruisers* [1921]）』の作者としても知られる。一方、オールサムはのちにジェリコーの伝記を執筆している。なお、「ビーティー」の項目は第12版でヤングが担当し、第13版ではビーティーに近い関係にあったアーサー・ポーレンが執筆している。また第14版〔1929年〕においては「ジュトランド海戦」の項目ではないもののハーバーが項目執筆者となるなど、『ブリタニカ百科事典』からはジュトランド論争が透けてみえて興味深い。Edward Altham, *Jellicoe* (London; Glasgow: Blackie & Son, 1938); idem, 'Jellicoe, John Rushworth Jellicoe' and 'Jutland, Battle of,' *EB*, 13th ed., vol. 30 (London: The Encyclopædia Britannica Company, 1926), pp. 602-603 and 617-28; Arthur Joseph Hungerford Pollen, 'Beatty, David Beatty,' *EB*, 13th ed., vol. 29, p. 342; Alexander Bell Filson Young, 'Beatty, David Beatty' and 'Jellicoe, John Rushworth Jellicoe,' *EB*, 12th ed., vol. 30, pp. 422-23, and vol. 31, p. 657. e.g., John Ernest Troyte Harper, 'Falkland Islands, Battle of,' *EB*, 14th ed., vol. 9 (London: The Encyclopædia Britannica Company, 1929), pp. 53-55.

海軍省首脳が共感できるジェリコー批判を基調とし、巡洋戦艦隊に対し無批判な特徴をも有することから、ジェリコーを評価して巡洋戦艦隊には批判的と認識されたハーバー・レコードと『海軍作戦』第3巻を是認しなかった海軍省が受け入れるに相応しいものであったといえる。逆に述べるなら、それら二つを否認した海軍省にとって、それら以上にジェリコーに冷淡かつ巡洋戦艦隊を評価するものでなければ、公式記録として受け入れられなかったのである。その認識にデュワーはよく沿い、ビーティーも「海軍幕僚評価」に満足していた。

ビーティーがどれほど「海軍幕僚評価」に愛着を示していたかは、海軍省の返却要請に強く反発して、それを手元に残していたことでもわかる。ビーティーは、「海軍幕僚評価」の廃棄を現代史に対する犯罪行為であるとし、自ら有するそれを差し出すくらいなら軍法会議にかけられようとも述べているのである¹⁸⁰⁾。彼と交際のあったシェーン・レスリー (John Randolph Shane Leslie) によれば、ビーティーは「海軍幕僚評価」を鍵のかかった箱に保管し、限られた友人にその一部を読んで聞かせることを楽しみにしていたが、それを他人の手にゆだねることは許さなかった。レスリーは「海軍幕僚評価」を読ませてもらう機会を得たが、そのときビーティーは決して彼から目を離さなかったという¹⁸¹⁾。

1923年にビーティーは海相アメリー (Leopold Charles Maurice Stennett Amery) に対し、ジェリコーが怯んだために大海艦隊撃滅に失敗し、大戦

180) Beatty to Keyes, 10 Apr. 1932, in *KP*, vol. 2, p. 298.

ハーバーは、『ジュトランド海戦の謎 (*The Riddle of Jutland: An Authentic History* [1934]) の共著者であるラングホーン・ギブソン (Langhorne Gibson) から、彼が1932年にビーティーのもとを訪問したときに「海軍幕僚評価」を読むことを許されたと聞いた。それをどうしたら入手できるのかとギブソンに問われたハーバーは、盗むしかない (By burglary only)、と答えたという。Harper, *Facts Dealing*, Part II, Footnote, 1928, in *JP*, vol. 2, p. 482n. [この脚注は当文書の他の記述から考えて、1932年以降、1935年までに付加されたものではないかと思われる。] cf. Harper to Frewen, 23 Dec. 1944, in *BP*, vol. 2, p. 479.

181) Shane Leslie, *Long Shadow* (Wilkes-Barre, PA: Dimension Books, 1967), p. 214; Roskill, *Earl Beatty*, p. 333.

の期間を短縮できなかつたと述べたという¹⁸²⁾。なぜなら大海艦隊撃滅が成れば、対独封鎖を強化し、ドイツ潜水艦による通商破壊戦を妨げ、ロシア革命勃発前にドイツを屈服させえたからだという。これは「海軍幕僚評価」で主張された艦隊決戦勝利の戦略的効果である。「海軍幕僚評価」は、ジェリコーの不手際のために海戦の勝利を逃したことが大きな戦略的影響を及ぼしたという理論的枠組をビーティーに与え、さらにジェリコー批判の思いを強めさせたのであろう。ジウトランド海戦で総旗艦アイアン・デューク艦長を務めるなどジェリコーと親しい関係にあったドレイヤー(Frederic Charles Dreyer)大將は、なぜ軍令部長のビーティーが『ジウトランド海戦報告』を刊行してジウトランド海戦での彼の司令長官をぞんざいに扱うのか理解できないと述べているが、「海軍幕僚評価」という理論的裏付けをもってジェリコー批判の正当を確信していただろうビーティーが、ドレイヤーに満足されるようなジェリコーへの配慮を示すことはありえなかつたと思われる¹⁸³⁾。

「海軍幕僚評価」におけるジェリコーとビーティーに対する対照的評価は、両者とデュワールの個人的位置関係と無縁とは思われない。デュワーは自伝において、「海軍幕僚評価」を作成するにあたって、ビーティーを含めて誰の干渉も受けておらず、ビーティーはその完成まで「海軍幕僚評価」を見ることさえなく、デュワーもビーティーに一度だけ叙述の在り方について面談したのみだと述べている¹⁸⁴⁾。しかし、「海軍幕僚評価」編者へのデュワールの選定には、おそらくビーティーの意向が影響しており、デュワーがビーティーの意に沿うように「海軍幕僚評価」を作成したとの観察は広くおこなわれていた¹⁸⁵⁾。やはり、その内容から考えても、ビーティーの影響が「海軍幕僚評価」になかつたとは考えにくい。また、たと

182) L. S. Amery: *Diary*, 3 Aug. 1923, in *BP*, vol. 2, p. 463.

183) Dreyer, *Sea Heritage*, p. 185.

184) Dewar, *Navy from Within*, p. 267.

185) Beatty to Captain K. G. B. Dewar, 23 Apr. 1925, and, Lieutenant Cdr O. Frewen to Evan-Thomas, 22 Feb. 1927, and, Harper to Frewen, 23 Dec. 1944, in *BP*, vol. 2, pp. 465-66, 476, and 478; Harper, *Facts Dealing*, in *JP*, vol. 2, p. 482; Roskill, *Earl Beatty*, pp. 332-33, 349.

えデュワーの述べる通りであったとしても、「海軍幕僚評価」を作成したデュワーと、その内容を容認したビーティーのジュトランド海戦観は近似したものであり、ジュトランド論争における立ち位置はジェリコー批判という点で同じであったといえよう。

先述のように、デュワーが初めてビーティーに会ったのは、1918年3月末に大艦隊を訪れたときだったという。彼らはスカンジナビア向け護送船団の問題などにつき会話をもったが、大艦隊司令長官だったビーティーは無意識の勇気をまとった明敏な人物としてデュワーに強い好印象を与えたという¹⁸⁶⁾。実際には、それ以前の1917年夏以来、ビーティー周辺の大艦隊参謀たち、つまりチャルマース (William Scott Chalmers) 少佐およびロジャー・ベレアーズ (Roger Mowbray Bellairs) 中佐と海軍省にあるデュワーとの間には密接な協調関係が形成されていた¹⁸⁷⁾。その関係開設には、かつてのビーティーの幕僚で、もとよりデュワーと親しいドラックス大佐が介在していた。また、当時、大艦隊に所属していたリッチモンドもビーティーの信任を得ていた。人脈的にみて、明らかにデュワーはビーティーに近い位置にあったのである¹⁸⁸⁾。

リッチモンド、ベレアーズ、ドラックス、それにデュワーはともに海軍協会の設立会員であり、キースやビーティーが大戦中に海軍省改革と積極的攻勢を主張する彼ら「青年トルコ人」に共感する一方、「青年トルコ人」たちもビーティーに期待を寄せていた¹⁸⁹⁾。また、大戦中にリッチモンドやデュワーら「青年トルコ人」が行動してジェリコーの軍令部長解任に影響した改革運動にビーティーは共感し、それを容認してもいた¹⁹⁰⁾。1923年の

186) Dewar, *Navy from Within*, pp. 244-45.

187) Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 88-89. チャルマースはビーティーの伝記 (*The Life and Letters of David, Earl Beatty* [1951]) の著者として知られる。

188) 「海軍幕僚評価」作成後、1922年に北米・西インド戦隊に配属されたデュワーは、戦隊司令官パケナムのもとで勤務し彼を好感しているが、パケナムはジュトランド海戦当時、ビーティーの下で第2巡洋戦艦戦隊を率い、ビーティーが大艦隊司令長官に転じてからは巡洋戦艦戦隊司令官を務めた、ビーティーに近い人物であった。

189) Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 61-62, 67, 77-78, 90.

190) Davison, *Challenges of Command*, pp. 223, 242; idem, "Striking a Balance," p. 46.

キース宛書簡の中で『海軍作戦』第3巻についてコーベットを批判し、彼が強い親ジェリコー・反ビーティーの偏見を有していると述べるデュワーからは、その逆の反ジェリコー・親ビーティーの姿勢が強くなるかがわかる¹⁹¹⁾。もとよりデュワーは、兄アルフレッドとともにビーティーの信奉者であった¹⁹²⁾。

実際、デュワーの反ジェリコーの立場は明らかで、彼の自伝には数多くのジェリコー批判が散在している。たとえば、以前にジェリコーの幕僚であった参謀課程受講者の一人が、その課程に参加するのはためにならないのでやめるようにとジェリコーから言われたとする言及は参謀組織への彼の無理解と反感を示唆し、また護送船団方式への海軍省の消極的姿勢についての叙述は、その代表者であったジェリコーへの批判に通じるものである¹⁹³⁾。先述のように、海軍省入りしたデュワーは、週間評価報告書の内容をめぐってジェリコーと摩擦を生じ、おそらくはジェリコーにも疎まれて左遷されそうになった¹⁹⁴⁾。デュワーは1918年初頭に昇進できなかったことを、それまでジェリコーの意に沿わぬ見解を呈してきたためだと感じてもある¹⁹⁵⁾。また、ジェリコーは機密保持の観点から1915年に『海軍評論』を問題視し、結局、それは海軍省により一時停止へと追い込まれ、デュワーたち「青年トルコ人」の強い反発をかっていた¹⁹⁶⁾。

教育・訓練面や戦術思想面等で、これまでの海軍の有り様を批判してきたデュワーにとって、ジェリコーは、その海軍の化身といえる存在でもあった。デュワーは、ジェリコーが「23才から33才までの間、艦艇勤務はただ16か月間のみで、その軍務の大部分を、戦争遂行と関係のない技術的任務に過ごした」と指摘し、自ら批判する海軍の教育・訓練が生み出した

191) Captain Kenneth Dewar to Keyes, 22 May 1923, in *KP*, vol. 2, p. 88.

192) Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. 244; Schurman, *Julian S. Corbett*, pp.187-88.

193) Dewar, *Navy from Within*, pp. 154, 216-21.

194) *Ibid.*, pp. 221-25.

195) *Ibid.*, p. 242.

196) Davison, *Challenges of Command*, pp. 231-32; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 37.

代表例として彼を位置付けている¹⁹⁷⁾。ジェリコーは、試験の好成績で昇進を速め、過度の中央統制を特性とした海軍において庇護者フィッシャーにより取り立てられ、大艦隊海戦要務令に具現化される形式重視の部隊指揮を経験してきたが、戦術には関心なく、装備・技術面に専心して海軍軍人としての自己形成をなしてきた。また彼は、参謀組織を嫌い、独自の思考を有する部下を信頼せず、無条件に服従する者のみを侍らせ、自らと異なる意見を具申する者には報復すらしめた。このように批判するデュワーは、ジェリコーが大艦隊司令長官、そして軍令部長には不適格だったとするのである¹⁹⁸⁾。デュワーは、自らの改革志向からも、そして実体験からもジェリコーを好ましく思えるはずがなく、明らかにジェリコーへ反感を抱いていた¹⁹⁹⁾。

一方、ジェリコーも、デュワーを好感できなかつた。デュワーは、1917年5月に海軍省に出頭を命じられてジェリコーと初めて対面し、週間評価報告書の作成任務を与えられたが、彼が退出しようとした際、独自の意見を有するとのデュワーの評判についてジェリコーは触れ、その語調から、彼がそれを良くは思っていないことは明らかだったと回想している²⁰⁰⁾。デュワーは、ジェリコーが彼を望んでいたわけではなく、ある種の特殊な方法でジェリコーに押しつけられたのだと自覚していた²⁰¹⁾。実際、このデュワーの海軍省入りは、1917年5月に「青年トルコ人」グループのケンウォーシー (Joseph Montague Kenworthy) 少佐がリッチモンドの意を体して首相ロイド・ジョージと面談したことが影響してのものであり、リッチモンドやデュワー自身も首相と面談して自説を述べる機会をもってい

197) Dewar, *Navy from Within*, p. 358.

198) *Ibid.*, p. 242-43; idem, "Battle of Jutland," III, pp. 152-54.

デュワーは、大艦隊司令長官であったときにマハンの著作を知るまで、ジェリコーは戦争指導に関する海軍史や文献を読んだことがなかったといわれると述べている。これはリッチモンドが日記においてピーティーから聞いた話として述べている内容である。このことから、彼ら3人のジェリコーに対する認識がよくうかがわれよう。Dewar, "Battle of Jutland," III, p.153; Marder, *Portrait of an Admiral*, p. 251.

199) Patterson, *Jellicoe*, p. 235.

200) Dewar, *Navy from Within*, pp. 212-13.

201) Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 64.

た²⁰²⁾。先述の海軍省作戦課第16班の設置にも、デュワーと首相との面談が影響していたかもしれない。

そうした青年将校グループと首相など政治家との接触、そして、週間評価報告書をめぐるデュワーと海相ゲッデスとのつながりも、ジェリコーにとって好ましいものとは思われなかっただろう。ジェリコーは、ロイド・ジョージなどの政治家、さらに若手将校が戦略面に干渉することを迷惑に感じていた²⁰³⁾。1917年にデュワーを東インド戦隊へ左遷しようとした動きには、そのような背景があったものと思われる²⁰⁴⁾。大戦後、そのデュワーが作成した「海軍幕僚評価」の部分削除・修正版である『ジウトランド海戦報告』に接した際、ジェリコーはデュワーへの反感を新たにしたことだろう。その内容の不正確と不完全な推定に不満を示したジェリコーは、編者のデュワー兄弟にジウトランド海戦の公式記録を作成する資質があるとは思えないと批判している²⁰⁵⁾。ジェリコーは、デュワー兄弟の仕事を知識不足かつ、ずさんなものであると感じていた²⁰⁶⁾。

デュワーとジェリコーの間には隔絶があり、そのようなジェリコーを「海軍幕僚評価」において批判することに対し、自身の正しさを信じるデュワーには躊躇いはなかったであろう。そして、デュワーの批判の厳しさには彼の批判的思考傾向と、さらに自らの見解を主張したいという知的欲求も反映していたことだろう。「海軍幕僚評価」の作成は、それまで海軍について考察を深めてきたデュワーにとって、自らの主張を表現する絶好の機会であった。大戦終結後まもない時期の、まだ大戦中に感じたジェリコーへの不満や不信、ジウトランド海戦への幻滅感が生々しい状態において、デュワーは自らの主張を託して「海軍幕僚評価」を作成したので

202) Dewar, *Navy from Within*, pp. 230-32; Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 63-65, 71; Marder, *Portrait of an Admiral*, p. 257.

203) Davison, *Challenges of Command*, pp. 235-36.

204) *Ibid.*, p. 243; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 71.

205) Jellicoe to Frewen, 25 Aug. and 6 Nov. 1922, and, Jellicoe to the Secretary of the Admiralty, 27 Nov. 1922, in *JP*, vol. 2, pp. 416, 417-18, and 419-20; Roskill, *Earl Beatty*, p. 332; Schurman, *Julian S. Corbett*, pp. 191-92.

206) Schurman, *Julian S. Corbett*, p. 191.

あった。

しかし、単縦陣批判など当時一般的な戦術思想に対する批判も強いデュワーの個人的主張が明らかであればあるほど、それは反発を招くことになった。ハーパーによれば、1922年に彼も参加していた戦争課程において、デュワーが「海軍幕僚評価」の内容を講義したところ、受講者全てに不評であり、反発をかったという²⁰⁷⁾。また、ジュトランド海戦でのジェリコーの指揮を評価する向きも強く存在していた。たとえば、ジュトランド海戦において巡洋戦艦隊の第1巡洋戦艦戦隊司令官として巡洋戦艦プリンセス・ロイヤル (HMS Princess Royal) にあったブロック大將は、1927年にドレイヤーに対し、ジュトランド海戦においてジェリコーに過失はなく、彼が直面した困難を考えれば、それは驚くべきことだと思うと述べたという²⁰⁸⁾。客観的記録を旨としたハーパー・レコードでさえ批判を受け論争的となったことを思えば、ジェリコーへの批判とデュワーの個人的主張が強く盛り込まれた「海軍幕僚評価」が大きな反発と論争を巻き起こすのは当然のことであった。

「海軍幕僚評価」をもって、デュワーはジュトランド論争における代表的登場人物の一人となったが、それは同じく「青年トルコ人」の仲間であったリッチモンドやドラックスとの身の処し方の違いを現した。リッチモンドは、当初はジュトランド海戦におけるジェリコーに批判的であった²⁰⁹⁾。しかし、リッチモンドはハーパー・レコードに対するピーティ어의干渉にも批判的で、ジュトランド海戦の関係者は海戦記録の作成に関与すべきでないと思っており、1922年にはコーベットのジュトランド海戦についての見解を理解するようにもなっていた²¹⁰⁾。リッチモンドは、デュワーの歴史叙述を疑問視するコーベットの見解を共有していたといえよう。デュワーとリッチモンドは重なる面の多い同志関係にあるが、リッチモン

207) Harper, *Facts Dealing*, in *JP*, vol. 2, p. 482; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 117; Moretz, *Thinking Wisely, Planning Boldly*, p. 161.

208) Dreyer, *Sea Heritage*, p. 186.

209) Marder, *Portrait of an Admiral*, pp. 238, 247-49, 253-55, 280, 351-52, 356, 363-64.

210) Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 115-16; Marder, *Portrait of an Admiral*, p. 361; Schurman, *Julian S. Corbett*, p. 191.

ドがジユトランド論争に距離を置いて、そのこともあって次第にピーティーから離れていったことと、デュワーのジユトランド論争における行動は対照的といえる²¹¹⁾。また、大戦中は海軍省改革を望んで動いていたドラックスも、将校の自発性の欠如や過度の中央統制という海軍の性質の欠陥を指摘しつつも、ジユトランド海戦におけるジェリコーについては個人批判を控えている²¹²⁾。

リッチモンドらとは違って、「海軍幕僚評価」において付度なしのジェリコー批判を展開したことは、海軍の中でデュワーの存在を際立たせたに違いない。それには、左遷の危機さえ招いてきた、自主独立した思考をもって積極的行動をなす彼の強い個性も影響していたことだろう。そして、その個性こそが、海軍軍人としての彼の人生に影を落とし、ロイヤル・オーク事件以降の失意の展開を招く一因にもなったのであろう。

おわりに

デュワーが批判する海軍の有り様を象徴する人物がジェリコーであり、また、デュワーは海軍におけるジェリコーとの個人的関係からも彼に好意をもちえなかった。デュワーの「海軍幕僚評価」がジェリコーに対し非常に批判的となるのも当然といえるだろう。ただし、デュワーが「海軍幕僚評価」での批判を、より抑制していたとしても、「海軍幕僚評価」から批評を削除した『ジユトランド海戦報告』がジェリコーらの強い反発を受けたことを思えば、やはりジユトランド論争の激化は避けられなかっただろう。

デュワーの経歴を概観してみると、自身としては当然かつ控えめなつもりで提案をして、もしくはしようとして、それが容れられないばかりか、上官から反発やたしなめを受け、さらには左遷されそうにもなった経験を

211) Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 109, 115, 129.

212) [Drax], "Jutland or Trafalgar"; Davison, *Challenges of Command*, pp. 241, 244-45; idem, "Striking a Balance," p. 51.

彼は多々有している²¹³⁾。しかし、そうした苦い経験も彼の行動に変容をもたらすことはなく、以後も彼は反感や不利益を被ること度々であった。「海軍幕僚評価」の作成も、そうした例の一つに入るであろう。たとえデュワーが上官の反感をかわないように努力しているつもりでも、やはり彼の主張は反感をかってしまうのであった。事実の公平な評価者というよりも、むしろ検察官のそれであるようだと評された、「海軍幕僚評価」の叙述に表れていた彼の性格や姿勢が、そこには影響していたのであろう。

デュワーが自説を強く盛り込んだ「海軍幕僚評価」を作成して、それをジュトランド海戦公式記録の原型ともなしたものは、その内容が軍令部長ビーティーの意に沿っていたためである。もとより才能ある若手を好み、「青年トルコ人」に共感的であり、ジェリコーへの反感も共有していたビーティーは、デュワーと共感・協調する関係にあり、その信任は『世界の危機』を執筆するチャーチルに助言者としてデュワーを推薦するほどであった。

それゆえにか、ビーティーが1927年に軍令部長を退いて海軍省を去ったあと、軌を一にするようにしてデュワーの運命も暗転する。新たな軍令部長マッデンはジェリコーと関係が深く、デュワーは自身がマッデンにとって好ましい人物 (*persona grata*) ではないと自覚していた²¹⁴⁾。そして実際に、マッデン軍令部長時代に生じたロイヤル・オーク事件で彼の海軍軍人としての将来は閉ざされてしまったのである²¹⁵⁾。その事件処理の妥当性はともかくとして、自らの正しさを堅く信じて自説を強く主張するデュワーの性格も事件の展開に影響していたことはまちがいない。これまで軍令部長ジェリコーの不興をかい、また海軍大学など自ら望むところの職務に就くことを妨げてきたとも思われる彼の強い個性が、そこでも発揮され

213) Dewar, *Navy from Within*, pp. 65-66, 73-74, 125-26, 185, 207, 222-24, 257.

214) *Ibid.*, p. 307.

215) ロイヤル・オーク事件は、地中海艦隊司令長官キースの将来にも影響を与えた。ビーティーに近く、将来の軍令部長就任が予想されていたキースは、この事件によって評価を落とし、結局、軍令部長とはなれなかったのである。Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 239-46; Glenton, *Royal Oak Affair*, pp. 170-71; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 170.

たといえよう。かつてデュワーは2度の左遷の危機を免れてきたが、ビーティーの軍令部長時代が終わった今回は切り抜けることができなかった。旧式主力艦2隻の艦長を務めたあと、少将に昇進して退役となったのである。ジウトランド海戦公式記録の作成においてビーティーの意向に反したハーパーも、先んじて1927年に不本意な退役を余儀なくされていた²¹⁶⁾。ジウトランド論争での立ち位置に関係なく、それが関係者の人生に与えた影響は大きかった。

デュワーは有能な知的エリートであったが、その狷介な個性も影響して、結局、海軍という組織に上手く順応できずに50歳で退役に至った。のうち中将〔退役〕に上り、戦史班ではあるが第二次世界大戦で海軍省に復帰したものの、老境に向かうデュワーには自らの波乱に満ちた海軍人生とその挫折に思うところが多かったのではないかとも想像される。しかし、たとえそこに反省があったとしても、彼のジウトランド海戦についての見解には変化はなかった²¹⁷⁾。後年、デュワーは、「海軍幕僚評価」の配付・公表が中止になったのは、「その正確性が疑問とされたわけではなく、それが論争を激化させるという反対意見がなされた」ためだったと述べている²¹⁸⁾。

ビーティーからジェリコーに親しいマッデンへと軍令部長が代わるとともに親ビーティーのデュワーが退役に至ったことは、やはりジウトランド論争の構図を彷彿させるものがある。ジウトランド海戦の影は退役後もデュワーにつきまとい、落選となった1931年の総選挙では、デュワー陣営の選挙パンフレットにジウトランド海戦と1931年にインヴァーゴードンで生じた水兵のストライキ事件、いわゆるインヴァーゴードン反乱事件（Invergordon Mutiny）を関連させた表現、つまり「イギリス海軍は1916年にジウトランド海戦で以前のドイツ皇帝を打ち破り、そして1931年には

216) 拙稿「ジウトランド論争とハーパー・レコード」、104頁。

217) Dewar, "Battle of Jutland," I-III. デュワーは1959年から翌年にかけて『海軍評論』に掲載された「ジウトランド海戦」1～3において、「海軍幕僚評価」と同様の批判と主張をなしている。

218) Dewar, "Battle of Jutland," III, p. 146.

インヴァーゴードンでモンタギュー・ノーマン氏を打ち破った」との表現があったことで批判を受け、それは彼の選挙に悪影響した。ノーマン (Montagu Collet Norman) は当時のイングランド銀行総裁であり、労働党候補の海軍提督デュワーの選挙宣伝としてありうる表現とはいえるが、まだインヴァーゴードン事件の記憶が鮮明なときに、その事件とジウトランド海戦を結びつけた表現は、特に海軍基地の街であるポーツマスの選挙区 (Portsmouth North) で用いるには大いに不適當であった²¹⁹⁾。

結局は彼の人生に幸いしたとはみえないジウトランド海戦であるが、最後までデュワーにとっては離れがたいものであったようである。彼が1964年に84歳で亡くなったとき、未完成で残された評論遺稿の表題は「ジウトランドからシンガポールへ (Jutland to Singapore)」というものであった²²⁰⁾。ジウトランド海戦との関りが彼の人生においてどれほど大きなものであったのかが、この最後の遺稿表題からも感じられよう。

219) “Admiral Dewar’s Apology,” 30 Oct. 1931, *Times* (London), p. 14; “Propaganda in Portsmouth: A Labour Poster,” 26 Oct. 1931, *The Times* (London), p.14; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 226-27; Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 208-209.

デュワーは、問題の表現がジウトランド海戦とインヴァーゴードン事件を関連付けたものではなく、また、自身はその図案に気づかずに不注意ではあったかもしれないが、その図案とは無関係だったとタイムズ紙上で弁明している。

220) Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, p. 230; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 209.